

藏臣忠説真

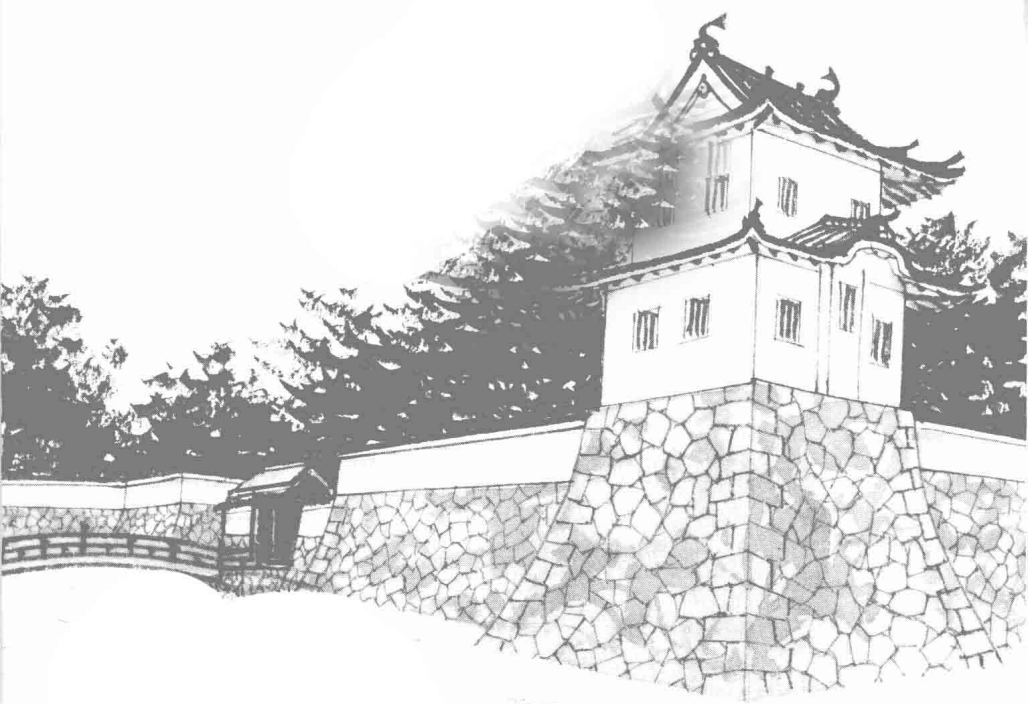
一誠村森



新潮社版

忠臣蔵

森村誠一



しんせつちゆうしんぐら
眞説忠臣蔵

昭和五十八年四月十五日 印刷
昭和五十八年四月二十日 発行

定価九八〇円

著者 森村 誠一 もりむら せいいち

発行者 佐藤 亮一 さとう りやういち

発行所 株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部〇三―二六六―五一―一
編集部〇三―二六六―五四―一
振替 東京 四―八〇八番
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・大口製本株式会社
© Seichi Morimura, Printed in Japan, 1983

ISBN 4-10-321705-7 C 0093

真説忠臣蔵／目次

死 面 皮

五

犬 死 碑

四

不義士の荊門

一七

怯者の武士道

一七

末代の武士

三九

装
画

東
啓
三
郎

真說忠臣藏

死^し

面^{めん}

皮^び

それは美しくも凄惨な眺めであった。前日降り積った雪に陽の光が眩しく映えて、夥しい死体から降り撒かれた血潮との対照をむごたらしく際立たせている。

死体は邸内の到る所に転がっていた。座敷、書院、玄関、台所、表門、長屋出口、馬屋前などに雪を朱に染めて倒れている。その間にまだ息のある負傷者が呻いていた。

戸障子や屏風は無惨に突き破られ、切り裂かれ血飛沫を浴びて蹴倒されている。壁に鮮血と共に血の手形がついている。柱や鴨居には刀疵が残り、死傷者の手から離れた刀や鞘や槍が散らばっている。畳は土足で踏み汚され、斬り落とされた槍の螻蛄首が突き刺さり、襖には折れた半弓の矢が引つかかかって揺れていた。まさに足の踏み所もないような修羅の荒れ狂った跡であった。

検按使は、その凄まじい乱闘の跡に息をのみながらも、忠実に役目を果たしていった。死者は主人の他に十六名、負傷者は二十三名、その中二名は瀕死の重傷である。二人の使者は御小人目付に手伝わせて死体と傷者を詳しく検めた。

死体にはいずれも刀、槍、矢疵があり、また彼らの太刀の刃こぼれから激しい抵抗をしたことが察せられた。十六名の死者の中士分の者は十三名で、その他の三名は坊主と中間である。彼らも武士に劣らず勇戦した形跡があった。負傷者二十三名中、士分の者は十七名であり、他は中間三名と門番、駕籠の者、馬取り各一名であった。

生存者の中に、いかにも戦傷したごとく、故意に自ら傷つけた人間もあったが、検按使に一目で刀槍の疵ではないと見破られて失笑をかった。

死傷者はいずれも邸の者ばかりで、襲撃者側の死体は一つもない。これは邸側が寝込を襲われてほとんど身支度をしていなかったのに対して、襲撃者が十分な身ごしらえと武装を施していたためであろう。検按使がうけた情報によれば、襲撃側の損害は軽傷者が四名だけということである。主人を含めて十七名の死者の中に首のない死体が二つあった。一体はこの邸の主、吉良上野介義央であるが、他の一体は用人鳥居理右衛門のものであった。鳥居は死者の中でも最も勇敢に戦った模様で、死体には多数の向う疵が残り、その刀は刃こぼれでささらのようになっていた。

死傷者の検按を一通りすませた御目付、阿部式部は、鳥居理右衛門の死体の前に戻って首を傾げた。

「なにかご不審でもござるか」

同行の検按使、杉田五左衛門が、式部の表情を逸速く読み取って質ねた。

「されば……」

阿部式部は死体を指して、

「なに故にこの者の首を取っていったのでござろうかの」

「そのことならば怪しむほどのものでもござるまいに」

五左衛門はこともなげに笑って、

「それは擬装でござるよ。上杉勢の追手がかかりたる場合、あるいは公儀役人よりお咎めをうけたときに備えて、偽りの首を用意したのでござろう。鳥居とやらは上野介殿と同じ年格好でござれば……」

言われてみれば、鳥居理右衛門は討ち死にした者の中で最年長者であり、義央（六十二歳）と最も年齢が接近している。

「そのことは、拙者も考えたのですが……」

阿部式部の面に塗られた不審の色は消えない。まだ何か？ と問うように五左衛門が式部の顔を覗き込んだ。

「この斬り口を見られよ」

式部は、鳥居の胴体に熟れた果物を潰したように開口している斬り口を指して、

「いかにも拙な斬り口とおもわれませぬか。鈍刀を何度も叩きつけてようやく斬り離れたような斬り跡です。亡君の仇を報じた天晴れ赤穂の士ともおもわれぬ未熟な斬り口でござる」

「お言葉ではござるが、赤穂の士とて打ち物としての一刻にわたる働きにて疲労いたしておったでござろう。また刀も刃こぼれが激しく役に立たなくなっておったとも考えられる。そのような有様にて人の首を斬り落とすのは難事であつたと推察されます」

「上野介殿の斬り口は見られたか」

「いかにも見事な斬り口でござった」

「さすればなぜ、理右衛門の首はかく未熟な斬り口なのでござろうか」

「赤穂の士とて、すべて手だれの者とはかぎるまい。これはべつの者が斬り落としたのでござろう」

杉田五左衛門は少し面倒くさくなつたようである。

赤穂の一党が吉良邸に討ち入り、首尾よく吉良上野介の首級をあげ、亡君の意趣を晴らした旨愛宕下西久保にある大目付仙石伯耆守の邸に届出がなされたのが今朝六ツ半時（午前七時ごろ）

である。十五日は毎月定例の大名旗本の総登城日であった。出仕の支度をしていた伯耆守はこの届け出に接し、急ぎ登城して事件の概要を出仕したばかりの老中、若年寄に申達した。

相前後して泉岳寺から届出をうけた寺社奉行阿部飛驒守、与力同心の報告をうけた町奉行松前伊豆守などの上申が集まり、引きつづいて吉良左兵衛義周よしかからも一家の「被害届」が出されたので、太平無事の幕閣は大いに驚いた。

早速閣議が開かれた。そしてなにはともあれ浪士たちを伯耆守が取り調べにあたり、吉良邸へ目付を派遣して現場の検証をすることになったのである。

冬の陽ははや、かげりはじめて、風が冷たさを増している。門前には物見高い江戸の弥次馬が追っても追っても集まって来る。彼らは口々に赤穂浪士の拳を誉め称え、同じ舌で吉良を罵った。中には邸に向けて石を放る者もいる。

無惨な死体を大量に検視して、五左衛門はうんざりしているようであった。式部にしてもそれほど夥しい死体に接したのは初めてである。

慶長八年（一六〇三年）家康が江戸開府以来、約一世紀を経て徳川幕府の体制は揺るぎなきものとなり、全国諸大名を掌握して、確固たる中央集権制を築き上げていた。すでに戦国乱世は遠い昔となり、文治的傾向の中に絢爛たる文化の花が開いた。貨幣経済の発達に伴い町人の勢力が次第に武士階級を圧倒するようになっている。

このような世相の下では武士といえどもかくも大量の戦死者に遭うことはあり得ない。杉田五左衛門は死体の山に辟易し、露骨に引き揚げたがっていた。彼らが検視を進めている間に徒目付かちめづりによる隣家の事情聴取もあらかた終っていた。

陽の光の下では、凄惨美を訴えた現場も、日が陰に入るととたんに陰々滅々として、大量の死

体置場と化してしまう。後片づけや怪我人の手当てに従事している吉良家の人間も意気消沈している。検視がすんだ死体から順に、血や泥を拭い落として棺に納めているが、遺族が近くに住んでいる者は、対面まで葬るのを待っている。冷たい風に明らかに死臭が乗っていた。

「いずれにしても浪士どもに確かめれば分明がみんようすることにござれば」

式部も、五左衛門の胸の内を読んで斬り口に関する詮議をひとまず打ち切った。

検視および近隣の取調べを終えた阿部式部ら一行は帰城して報告した。浪士の取調べも終り、ここに討入りの概要、泉岳寺までの引揚げの様子、吉良家および上杉家の態度などもわかり、関係書類も揃ったので、老中、若年寄評議の上、將軍綱吉に上申して浪士の処分について決裁を仰ぐことにした。

その際、老中筆頭、阿部豊後守が、

「かねて上様より文武忠孝を励むべき御沙汰賜わり、上様御自らも人倫の道を説かれておわします。本日の一挙は、これが形となって現われたるものにしていかにもよきご治世の結実と存じます。かかる一挙は末代までの誉れにござりますれば、浪士一同を一時大名にお預けの上、十分なるご詮議を遂げさせられたる後、ご処分あつてしかるべくと存じ奉ります」

と言上したので、綱吉も動かされ、浪士を大名四家に一時預けることに決定した。

二

とりあえず浪士の仮の処分が決まって柳営にはホッとした空気が流れた。幕閣を始めとして、

世論は浪士団に与^よっていた。家族を捨て、いつさいの私欲を断ち切り、艱難^{かんなん}辛苦に耐えて遂に亡君の意趣を晴らした赤穂浪士は武士道の精華であり、武士の鑑^{かがみ}であつた。太平の御代^{ごだい}に狎^なれて、武士道が形骸化しつつある時世に、最もドラマチックに身をもってそのなんたるかを実演して見せた浪士団に、武士はもとより、裏長屋の女子供までが興奮した。

阿部豊後守が綱吉を誘導した言葉の通り、当時の武家法度式目第一条の「忠孝を励むべし」が、武士だけでなく、社会の憲法であり、道徳の基本であつた。赤穂浪士の一挙は、この憲法を見事に体現したのである。太平で事件らしい事件のない時代に、主君に対する誠忠を輝く金看板として背負い、雪の夜を鮮血に染めた。難しい理論をおいても、そこには大衆を魅了する圧倒的な格好よさがあつた。

それに反して吉良方の評判はすこぶる芳しくなかつた。もともと殿中刃傷事件における幕府の片手落の裁決による吉良に対する反感の素地^{しど}があつたのである。

だが阿部式部は、洪水のような浅野鼯^{びき}鼠^{ねずみ}の中で、その奔流に竿をさす一片の気がかりがあつた。それは鳥居理右衛門の首である。

理右衛門についてはその後の赤穂浪士の取調べなどによって、吉良方の武士の中で最も勇敢に戦つた一人であつたことが判明している。

六十歳という老骨にもかかわらず、上野介と傷ついた左兵衛義周を須藤与一右衛門と共によく守り、浪士方を悩ませた。理右衛門の死んでいた場所や死体の状況から判断して、彼が最後に立ち合つた相手は、不破数右衛門と推定されている。

原惣右衛門の「討入実況報告書」によれば、不破の目覚ましい奮闘を誉めたたえて、

「——数右衛門働きにて勝負いたし候相手も形の如く手ききにて、数右衛門之も数か所切付け候

へども、着込の上にて候故、疵もこれなく候。小手、着物は悉く切りさかれ申し候。その身の刀もさざらとこそ申し候、刃はみなこれなきように罷なり、四、五人も切りとめ申すつもりにござ候」と書き記している。

この「形の如く手きき」が鳥居理右衛門のようであった。

検視の後、浪士に問い合わせたところ、だれも理右衛門の首級を上げた者はないということであった。彼らが取ったのは上野介の首だけだったという。諸事神妙に処して、一挙の趣意と始末を委細つつみ隠さず陳べている浪士が、理右衛門の首についてだけ偽りを申し立てるとはおもえない。ここに杉田五左衛門の「擬装首説」は否定されたのである。ならば理右衛門の首はだれが何のために取ったのか？ またその所在はどこか？

以上の疑問が式部の胸中で次第に容積を大きくしてきた。

首を取ったのが浪士でなければ、次に考えられるのは邸内の者か、外部の者である。浪士が引き揚げてから、上杉家の使いや医者や検按使一行が来るまで多少の間隙があったから、その間に首を取れないことはない。しかし邸内には生存者もあり、浪士一同が引き揚げた後は、血の臭いがあふれ、まさに「鬼哭啾々」といった有様であったであらう。

近所の者も恐れてしばらく近寄らなかつたというから、この間に邸内に入り込むには、よほど剛胆でなければならぬ。外部の者でなければ、次に疑わしいのは上杉家である。浪士引揚げ後最も先に駆けつけたのは、上杉家の使いである。医者や式部ら一行が来たのは、それよりはるか後であった。

上杉家の者がなんらかの事情があつて理右衛門の首を隠したければ、十分可能である。浪士が

去った後の邸内は混乱状態であり、生き残った者も動転、あるいは茫然自失していた。そのような中で首一つ盗むことはさして難しいことではあるまい。

上杉家にももちろん件の首については質ねられていたが、同家ではまったく関り知らないと答えている。上杉家が首の行方を知っているが黙秘していることは考えられる。

“犯人”が上杉家だとすれば、なぜ首を取り、それを黙秘するのか。理右衛門は、吉良家の用人であり、上杉家から派遣された付人ではない。理右衛門の身上については上杉家も吉良家の生存者も詳らかに知らない。吉良家の家老松原多仲に訊いたところ、上野介が昨年八月十九日呉服橋内の旧邸から本所の現在の邸に移ったとき、用人としてどこからか召し連れてきたという。また理右衛門には身寄りの者はいなかったようである。

上杉家が理右衛門の首を利用するとすれば、擬装としてである。突飛な想像であるが上杉家では、赤穂浪人の乱入を予想して上野介の影武者を仕立てたのではあるまいか。

だがこの想像は、式部本人が打ち消さざるを得ない。浪士に討たれたのは誤りなく上野介本人であった。上野介は式部もよく見知っており、松原多仲から聞いた理右衛門の人相とおよそ似ているところはない。上野介は痩せて顴骨が張り、鼻梁の尖った見るからに神経質な顔立ちであったが、理右衛門は、全体に円みをおびた顔立ちで、感情の表出に乏しいというより、喜怒哀楽いずれともとれる中間的な表情の持ち主だったそうである。

赤穂の浪士の討入りがいっあるかと怯えていた上野介にとって、常にゆったりと変らぬ理右衛門は頼り甲斐があつたらしい。

体つきも瘦せて小柄な上野介に反して理右衛門は六尺近い上背があり、がっしりした骨格であった。これは検視にあたつた式部自身が確かめている。要するに兩人が接近していたのは年齢だ

けで、それ以外の身体的共通項はなにもない。またたとえ共通項があったとしても、上野介の身体には顕著な特徴があった。それは松の廊下において内匠頭（たくさな）に斬りつけられた額と肩から背中にかけての疵である。額の疵は烏帽子止めに妨げられて軽微であったが、背中の疵は五寸余のやや深手であった。これと寸分ちがわぬ疵を“偽造”するには、上野介の負傷直後に赤穂方の報復を予期して影武者を仕立てなければならぬ。

それは不可能であるし、理右衛門の体にはそのような疵は見当たらなかった。

だが影武者でなかったとすれば、上杉家が首を隠すべき利益も理由もなさそうである。

上杉家でなければ、理右衛門に隠れた身寄りの者がいて首を取ったと解釈すべきであろうか。身寄りがあれば、申し出れば遺骸を下げ渡された。なにも遺骸の“一部分”だけ盗む必要はなかったはずである。

“犯人”は、赤穂浪士、部外者、上杉家、理右衛門の隠れた身寄りのいずれでもなければ、残すは吉良家だけである。吉良の家中であれば、浪士の引揚げ後、首を隠すのは容易である。だがなぜ吉良家がそんなことをしたのか？ 影武者でもなければ、吉良家に首を隠すべき理由はまったくない。

“犯人”がだれであるとしても、首を取る理由としては、

一、その首になんらかの価値があった場合

二、首があつては不都合が生じる場合

の二つである。赤穂方の擬装用は一度、影武者用としては二の場合にあてはまるが、これはいずれも否定されている。

式部は、あれこれ勘案したあげく“犯人”としては吉良家がいちばん疑わしいという結論に達